No. 16（2018. 3）

武庫川女子大学
武庫川女子大学短期大学部

FDニュース

第16号

● 目　次 ●

〔1〕教育学科 FD の取り組み
〔2〕第 3 回　教育改革講演会
「障がいのある学生の修学・就労支援について」
平成29年度　FD 研修会開催報告
第 1 回「アクティブラーニング型授業をデザインする」
〔3〕第 2 回「授業デザインにおけるシラバスの意義とその作成について」
第 3 回「いかにして学生の理解が深まり、学習効果が高まるのか」
〔4〕全国私立大学 FD 連携フォーラム　実践的 FD プログラムのご案内
平成29年度　FD 推進委員会メンバー
編集後記

FD ニュースでは、これまで各学科における FD の取り組みを順次紹介してきました。今回は、教職課程でのタブレット端末の活用というテーマで行われた教育学科の FD 活動を紹介します。

教育学科 FD の取り組み

教育学科　神原一之・佐々木春美

教育学科では、年に 3 回、FD 研究会に取り組んでいます。教育学科は、これからの教育を担う学芸と実践性を兼ね備えた教員の養成をめざして、高い水準の教員養成を進めていかなければなりません。ここでは、平成29年 8 月に行われた学科 FD 研究会について報告します。

周知のように、小中学校の現場では、すでにかなりの伸びでICT機器、特にタブレット端末の整備が進んでいます。そこで、大学教育・教員養成の中でタブレット端末活用の可能性はどこにあるのか、どのような授業の中で活用されることが子どもたちの能力を引き出すことになるのか、などを主たるテーマに、「タブレット端末を活用した授業の現状と未来」と題した学科FD研究会を開き、教職課程におけるタブレット端末活用の可能性について講義と協議を行いました（参加者：教員等38名、事務職員 6 名）。

初めに、「タブレット端末の効果的な授業への活用について―大教 4 年「教科算数演習」での実践―」として実践報告を行いました。算数科関連科目の取組みの一つとして、タブレット端末を使って教材や考えを「視覚化」したり、思考の論点を焦点化したり、試行錯誤のツールとして使ったりしたタブレット端末活用の具体的な授業づくりについて映像を交えて発表しました。その中では、とくに学生のタブレット端末の活用に対する意識が、「使ってみたい」から「効果的に使った授業づくりをしたい」と、授業を重ねるごとに変容していった様子も明らかにしながら報告しました。

次に、タブレットソフト開発会社の講師から「学校現場におけるタブレット端末の現状と未来」をテーマに全国における整備の進み具合や実践例を紹介いただきました。タブレット端末活用の土台は「規律と授業力」であって、タブレット端末を使うための授業をしないこと、すなわち、使用することが目的ではない点には、学科の教員も大いに納得したところです。

その後の協議では、教員側から、

＊複数教室で使用時のネット環境について
＊先進市における取組み及び現職教員の研修について
＊大学の一斉講義型授業における活用事例について
＊特別支援教育での使用目的及び活用事例について
＊教員養成大学における取組みについて
＊他種（iPad など）との比較について

など、多くの質問や意見が出され、とても活発な研究会になりました。

現在、学校教育館には、20台のタブレット端末が整備されています。今後、教育学科では、学生たちに実践を積ませて指導のスキルを身につけさせるとともに、幅広い視野で教材研究や授業設計に取り組むことができるように、そのツールの一つであるタブレット端末や電子黒板等の活用を広げていくことができればと考えています。

第３回教育改革講演会「障がいのある学生の修学・就労支援について」

平成29年10月４日（水）に「社会福祉法人すいせい」学生・就職困難者キャリアサポート事業＋Uマネージャー塚田吉登様をお招きし、約60分間の講演をいただきました。

当日の講演ではまず平成29年３月に示された「障がいのある学生の修学支援に関する検討会（平成28年度）第二次まとめ」の内容確認があり、その後、精神障害・発達障害の理解に関する説明と続きました。

講演の中では、他大学を含め、教員側からよくある質問として、「障がいのある学生に対して成績評価をどのようにすればよいか」という事例を挙げられました。塚田様の回答としては「教育目標や公平性を損なうような評価基準の変更、合格基準を下げるなどの対応は行わないのが基本であり、学生の機能障害の状態を踏まえ、その学生における公平な評価のあり方について個別検討することが必要である。合理的配慮の内容は授業担当者・本人・専門家で協議し、妥当性については組織的判断で行う。」ことを薦められました。

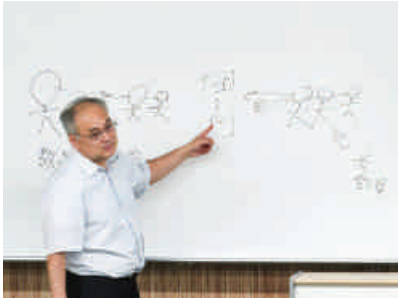
すでに現時点で高等教育機関に所属する障がいを持つ学生の人数は約27,000名に昇っており、教育機関での特別支援ニーズは確実に増加していきます。この４月から本学では「学生サポート室」が開設されました。対応が必要なケースが出た場合、教員やその部署だけで抱えず、学生サポート室にまずは相談し、専門家を交えた対応をすることを念頭においていただければと思います。

平成29年度 FD 研修会開催報告

《第１回》「アクティブラーニング型授業をデザインする ～大学の授業に本当にアクティブラーニングは必要か？～」

昨年までは、前期終了の７月末の時期に、新任教員を対象としたFD研修会を開催していましたが、今年度より４月～７月の前期期間を通じた全15回の新任教員研修プログラムが始まったことから、今年はこの時期に、全教職員を対象としたアクティブラーニングに関する研修会を開催しました。

日　時：平成29年７月29日（土）13時00分～15時00分
場　所：文学２号館５階　L2-51教室
参加者：19名（FD推進委員５名含む）



講師にお招きしたのは、大阪大学全学教育推進機構教授として、年間を通じてFDに関するワークショップを開催しておられる山口和也先生です。「アクティブラーニングとは何か」について先生から「学生が主体的に学んでいるならば、講義も勿論内的活動（頭の中）はアクティブである。これに対して、学生が主体的に学んでいることが外からでも見える形になった授業スタイルが、アクティブラーニング“型”授業である。」と発言がありました。アクティブラーニング型授業は、書く、話す、発表するなどの「言語活動」にグループワークやペアワークなどの「協同学習」を加えた内容が中心であり、学生一人一人に合わせることができるとのことでした。

更に、参加者との意見交換をもとに、山口先生の専門である化学に関する授業の中で取り組んでおられるリフレクションノートやICT活用の工夫などの事例紹介の他、学習目標の設定や評価方法のポイントなどについてもご教示いただきました。「アクティブラーニングはあくまでも、学生が“何ができるようになるか”というゴールを達成させるための授業手法の一つであり、アクティブラーニングそのものが目的ではない。教員の役割は個々の学生がゴールを目指す手助けをすることである。」という先生の言葉が印象に残りました。

参加者からは「アクティブラーニングについて現実的で明確な定義が示されて参考になった。」、「わずかな工夫で、アクティブラーニング型授業が可能だと知り、発展させていくことが可能だと思った。」などのコメントが寄せられました。

《第２回》「授業デザインにおけるシラバスの意義とその作成について」

第２回 FD 研修会は、大阪電気通信大学で FD 分野を専門としている、齋尾恭子先生を講師にお招きし、「授業デザインにおけるシラバスの意義とその作成について」というテーマで講演及びグループワークを行いました。

日　時：平成29年12月８日（金）16時40分～18時10分
場　所：文学２号館３階　L2-33教室
参加者：14名（FD 推進委員５名含む）

当日は、前半約１時間を講演、後半15分をグループワーク形式で実施し、FD 推進委員５名を含む14名の教職員が出席しました。前半の講演では、講師より授業デザインとしてのシラバス作成について説明いただき、後半のグループワークでは、講演で取り扱ったシラバスの書き方を踏まえて自身のシラバスに修正が必要な箇所があるか、シラバスを通して学生に最も伝えたい「授業に対する思い」について、グループ内で共有しました。

研修会終了後の参加者からのアンケートでは、「教員中心のシラバス（授業計画）を見直す良い機会になると思う。」「Key Words を提示する、シラバスに宿題を書く、毎回小テストを実施するなど、取り入れてみたいヒントがあった。」「今回のような新人研修からのスピンアウトは良いと思う。年数を重ねて“わかったつもり”になっているけれども、その間に流れていく時代に取り残されて時代錯誤的な、非効率なことをしているかもしれない。FD は知識のアップデートの好機とすべきとの想いを新たにした。」など参加して良かったというコメントを多数いただきました。このアンケート結果は、今後の全学的な FD 研修会の参考にさせていただきます。

《第３回》「いかにして学生の理解が深まり、学習効果が高まるのか」

３回目の FD 研修会は、学生の理解の深化と学習効果を高めるための学内の先生方の取り組み事例の紹介と意見交換による勉強会として開催しました。

日　時：平成30年３月１日（木）15時00分～17時20分
場　所：文学２号館５階　L2-51教室
参加者：28名（FD 推進委員４名含む）

一人目は薬学部薬学科の森山賢治先生です。先生は、本学から毎年一人の先生が参加されている全国大学実務教育協会主催の「能動的学修の教員研修リーダー講座」に参加されました。その講座で学んだ内容の報告と、これまで先生が薬学教育において実践されてきた様々な取り組みと成果、そしてそれらを踏まえて、今の薬学教育の課題について説明されました。国家試験の高度化や改訂モデルコアカリキュラムによる授業内容の高度化等の一方で学生は多様化する現状から、森山先生ご自身は勿論のこと、薬学部の先生方がどれだけ危機感を持って教育に携わっているのか、その努力と教育に対する思いが伝わってきました。

二人目は生活環境学部食物栄養学科の有井康博先生です。先生からは大食1年の担当科目「基礎化学」の授業への予習動画の導入による効果と、同じく大食１年のリメディアルにおける学科・教務部・担当業者の連携による改善の取り組みが紹介されました。共に学生の意見や成績を定期的に確認し、取り組み状況を評価・分析した上で確実に改善に繋げておられることがよくわかりました。「学生は考え方も成績のレベルも様々であるが、大学として受け入れたからには“自分にも出来る”、“本学で学んで良かった”と実感出来るようにするのが教員の役目である。」「教員が研究している姿を学生が見ることも大切。研究と教育のバランスを取るためにも教育の工夫が必要である。」という言葉に、先生の大学教員としての思いが感じられました。

理系学科以外の先生や職員の参加もあり、所属を超えて意見交換が行われ、瀬口副学長からは「学生の多様化が進んだ今、知識の習得の方法も今以上に自由な発想で考えていく必要がある。実験（体験学習）を始めに行い興味・関心が高まった後、理論を座学で学ぶというようなことがあっても面白いのではないか。」とのアドバイスをいただきました。参加者からは「紹介されたアンケート用アプリを自身の授業でも活用してみたい。」、「教育に直接携わる教員の参加が少ないのではないか。」というような意見も出ました。

３回に亘って開催された FD 研修会。それぞれに新たな発見も課題もありましたが、それらを元に、一人でも多くの方に「参加してみたい」「参加して良かった」と思っていただけるような企画を今後も検討していきます。

※「能動的学習の教員研修リーダー講座」への参加者募集について

毎年、一般財団法人全国大学実務教育協会主催「能動的学習（アクティブラーニング）の教員研修リーダー講座」への参加者を１名募集しています。学生の理解を高めるためにアクティブラーニングを効果的に活用したいとお考えで、研修講座に関心をお持ちの方は４月13日（金）までに教育開発支援室へお申込みください。詳細は info@MUSES で案内しています。（対象は本学の専任・嘱託教員となります。）

全国私立大学 FD 連携フォーラム　実践的 FD プログラムのご案内

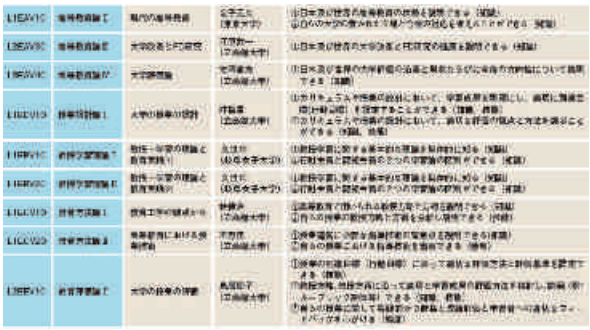
本学は、平成27年度より全国の中規模以上（学生数8,000名以上）の私立大学が連携し、全国の高等教育の質の向上を目指す「全国私立大学 FD 連携フォーラム」に加入しています。会員校は FD 連携フォーラムが提供する『実践的 FD プログラム』をオンデマンド等で受講することができることから、本学の教職員の方々に紹介いたします。

『実践的 FD プログラム』は、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察することができる知識、技能、態度、特にアクティブラーニングを実践する能力を修得する研修プログラムとなっており、
①教育学をはじめとした系統的な理論のオンデマンド講義
②授業技術やコミュニケーションスキルを育成するワークショップ
③個々の教員ニーズに応える日常的な教育コンサルテーション
から構成されています。

オンデマンド講義は、立命館大学の manaba+R 上で視聴できます。１つの講義は３つのパートに分かれており、概ね各パート約15分程度、全体約45分程度で構成されています。それぞれの講義について、「講義概要」、「到達目標」、「講義資料」が用意されており、いずれも manaba+R 上で繰り返し受講することができます。

オンデマンド講義の詳細は
http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/practice_course.html
で確認できますので、受講を希望される方は教育開発支援室までお問い合わせください。（手続き上、申し込んでから利用できるまで約２週間かかります。）

実践的 FD プログラムページ


オンデマンド講義の一例

（全国私立大学 FD 連携フォーラム Web サイトより　http://www.fd-forum.org/fd-forum/html/practice_course.html）

平成29年度　FD 推進委員会メンバー

	役　職	所　属	氏　名		役　職	所　属	氏　名		役　職	所　属	氏　名
1	委員長・委員	英　文	三宅　弘晃	7	委　員	食　物	升井　洋至	13	委　員	共　通	木村麻衣子
2	副委員長・委員	健　康	保井　俊英	8	委　員	情　報	和泉　志穂	14	委　員	教務部（薬学）	中村　一基
3	委　員	日　文	徳原　茂実	9	委　員	建　築	田﨑　祐生	15	委　員	法人課	星山　一剛
4	委　員	教　育	中村　明美	10	委　員	音　楽	大森　地塩	16	委　員	教務課	小森　華穂
5	委　員	心　福	佐方　哲彦	11	委　員	薬　学	岡村　昇	17	委　員	教育開発支援室	稲積　包則
6	委　員	環　境	森本　真	12	委　員	看　護	片山　恵	18	委　員	教育開発支援室	田中　邦子

編集後記

FD ニュース第16号の編集を終え、この１年間を振り返ってみると、その１年が経つことの速さに、自分なりに驚いた。ついこの前（2017年４月）、今年度の第１回の FD 委員会が開催され、その場で自分が言った言葉を思い出す。「FD とはあまり縁のなかった者が、今 FD と関わろうとしている。大きな FD だけでなく、小さな FD にも目を向けたい。」のようなことを言った記憶がある。このニュースで紹介しているのは、大きい FD のことであるが、小さい FD は、学科や立場等を超え、例えば入試の学外試験場や宴席の立ち話においてもされている可能性がある。その輪が少しでも大きくなれば、FD 推進の目的の一部を達成しているように思える。教職員が出会う縁を大切に、そこで学生のことを思う会話が弾むと FD につながっていく。そういう意味では、今回の第16号や大きい FD も会話のネタになっているかもしれない。いや、きっとそうなっていると願いたい。（FD 推進副委員長）